

短 報

大学図書館における OPAC の利用者の探索行動：
学生を対象としたインタビュー調査

OPAC Searching Behavior of Students
at University Libraries

宍 戸 奈 実
Nami Shishido

Résumé

To identify difficulties students face when they use OPACs, a survey was conducted at two university libraries. A total of 190 students were interviewed after using OPACs. From the results it was found, first, that the purpose of using OPACs was varied according to grade. For example, juniors were most likely to use an OPAC for their seminar class and seniors were for their thesis. Second, 60% of respondents were conducting known-item searches, while 40% were subject searches. More than 30% of those who conducted subject searches were fairly satisfied with their search results. However, they thought there should be some possibilities of getting a better result. Although the success rate of known-item searches reached almost 90%, users were not fully satisfied with the OPACs. In fact, nearly half of the users answered that they sometimes felt difficulties when using the OPACs. OPAC users face difficulties especially in subject searches, keyboard manipulation, and interpretation of search results. Based upon these results, some suggestions for improvement were made.

- I. 大学図書館の OPAC と先行研究・調査
 - A. 大学図書館と OPAC
 - B. OPAC に関する利用調査
- II. 大学図書館における OPAC 利用者調査
 - A. 調査の目的と内容
 - B. 調査の方法と手順
 - C. 調査結果
- III. OPAC 利用者のタイプ
 - A. 主題探索
 - B. 既知文献探索

宍戸奈実：慶應義塾大学文学部図書館・情報学科，東京都港区三田 2-15-45

Nami Shishido: School of Library and Information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo

受付日：1998年3月30日 改訂稿受付日：1998年5月28日 受理日：1998年6月1日

大学図書館における OPAC の利用者の探索行動

C. OPAC の利用頻度と利用の特色

IV. OPAC の利用上の問題点とその改善策

A. OPAC 利用上の問題点

B. OPAC の改善に向けて

付録 質問票

I. 大学図書館の OPAC と先行研究・調査

A. 大学図書館と OPAC

1. カード目録から OPAC への発展

OPAC (Online Public Access Catalog) は、『図書館情報学用語辞典』¹⁾では「オンライン閲覧目録」と訳され、“コンピュータ化された閲覧目録であり、書誌的記録は機械可読形 (MARC レコード) で蓄積され、オンラインによる対話方式で検索を行うもの”と解説されている。図書館利用者が直接に端末機を操作し、所蔵する資料を検索できるように設計されている OPAC は、所蔵資料の検索手段であり、カード目録の延長上にあるととらえることができる。

OPAC の導入は、既存の目録情報を機械可読の形式に置き換え、図書館自体の作業の効率化を図ろうとすることから始まった。現在の OPAC は、従来のカード目録に蓄積されていた内容が電子的な媒体に蓄積されたもの²⁾である。しかし、カード目録から OPAC への展開は、単に目録の形態上の変化だけにとどまらず、機能的にも実際の利用環境の面でも従来のカード目録とは全く異なった様相をもたらしている。

例えば、コンピュータの利用により、従来のカード目録に比べてアクセスポイントが飛躍的に増大し、既知文献の検索の向上だけでなく、キーワードの組み合わせ等による検索が可能になった。そして、OPAC では検索結果をさらに特定の条件で限定したり、生成した文献集合の演算を行うことも可能である。また、OPAC が従来のカード目録と大きく異なる点として、貸出管理との連動により、その資料が現在貸し出されているかどうか、そしてその返却期限はいつかなどについて

も知ることができるということもあげることができる。さらに、学内のどこにいても、あるいは学外からであっても、インターネット等を通じて直接に図書館目録にアクセスできるようになったことを機能の拡大の一つとしてあげることができる。

今後も OPAC は、カード目録が備えていた蔵書へのアクセスという基本的な機能をベースにしつつ、その機能をはるかに超えた新しいサービスを展開させる可能性をもっている。そして将来の大学図書館において、より高度な情報サービスを提供するための中心的な役割を担っていくものになるであろう。³⁾

2. 日本の大学図書館への OPAC の普及

日本の大学図書館における OPAC の現状については、1994 年に上田修一がアンケート調査⁴⁾を実施している。この調査の結果、日本の大学図書館では、1980 年前後から OPAC の導入が始まり、1980 年代末から急速に設置する図書館が増えはじめ、1994 年には、普及の後期から末期にさしかかっていることが分かった。また、日本の大学図書館における OPAC の普及率は、1994 年 8 月の時点では約 6 割であった。OPAC の導入計画について尋ねた結果から予測すると、OPAC の普及率は 1995 年には約 7 割、1997 年頃には 85% を越えるだろうと報告している。

3. OPAC の利用者

大学図書館における OPAC の主な利用者は、学生や大学院生である。その大部分は、情報検索や目録についてわずかな知識しか持っていないと予想される。

大学図書館の利用者が公立図書館の利用者と大きく異なるのは、公立図書館のような子供や高齢者がほとんどいないという点である。大学図書館の利用者は学生に限れば、利用者の年齢差は大きくなく、また大学で学んでいることから、利用者層は均質であるとも言えよう。

しかし、実際には大学図書館においても、情報検索や目録についてわずかな知識しか持たない OPAC 利用者が多い。こうした利用者の利用実態と OPAC の提供側である図書館が描く利用者像との間には大きなギャップが存在すると考えられている。それは、標準化された OPAC というものがなく、個々の図書館は独自のシステムを使っているからである。⁵⁾

B. OPAC に関する利用調査

1. OPAC に関する利用調査の事例

膨大な量の OPAC に関する利用調査が報告されているが、ここでは参考までに、国内外で行われた 3 つの OPAC に関する特徴的な利用調査を紹介する。

a. 複数の方法を用いた利用調査の事例:

Hancock-Beaulieu の調査 (1991)⁶⁾

ロンドンの City 大学の図書館において、トランザクション・ログ (利用記録) と質問紙調査による OPAC 利用調査をそれぞれ実施し、ログの分析と OPAC 利用者の考えが一致するかどうかを調査している。

この調査では、(a) 既知文献探索、(b) 主題探索、(c) 既知文献探索と主題探索の複合探索という 3 つの探索のタイプに分類している。ログの分析では、既知文献探索 53.6%、主題探索 35.4%、それに複合探索 11.0% であったのに対し、質問紙調査の結果では、既知文献探索 34.2%、主題探索 37.0%、複合探索 24.9%、不明 3.9% であった。このように、利用者が主題探索だと思っけていても、トランザクション・ログでは既知文献探索であるととらえるケースが多く見られた。

ログ分析の結果と質問紙調査における利用者の回答が異なっていたのは、全体の探索者のうち 37% を占めている。このように、トランザクシ

ョン・ログと質問紙調査の結果には大きな違いがあることが明らかにされている。

b. 自然な環境下で行われた調査の事例:

Wildemuth ほかの調査 (1995)⁷⁾

North Carolina 大学の図書館で実施した調査では、OPAC に近づいてきた利用者を対象に、面接調査を行っている。調査の結果、OPAC の利用について分かったことは、以下の 5 点にまとめられる。

- ① 全体の 64% が既知文献探索であった。
- ② 求めている資料についての書誌情報を 67% の利用者が完全な形で持っていた。
- ③ 既知文献探索において、ほとんどが本 (全体の約 3 分の 2) あるいは雑誌 (同 3 分の 1) を探していた。
- ④ 求めている資料についての書誌情報源は、半分以上が教授や授業のリーディングリスト、あるいは CD-ROM での検索結果を印刷したものであった。
- ⑤ 70% の検索が成功した。記憶や手書きのメモを頼りにし、その情報が不正確であったため、失敗に終わったのは、3% のみであった。

しかし、OPAC で検索するとき、書誌情報の中からどの項目がもっとも使われる傾向にあるのか、ということは、この調査では明らかにされていない。

c. 検索課題を用いた調査の事例:

上田修一ほかの調査 (1994)⁵⁾

端末の操作に慣れていることと、実験対象とした OPAC の利用経験があることを前提として、情報検索について教育を受けた学部学生と、OPAC の利用法を身につけた大学院生を対象とした調査を行っている。

この調査で用いた方法は、プロトコル分析と観察、それに面接調査を組み合わせたもので、利用者の OPAC 利用の多様な側面や、どのように考え行動したのかなどについて、ある程度深く知ることができる。

しかしながら、被験者の中には十分に発話しなかった例もあり、探索の失敗の原因が十分つかめなかったことが問題点のひとつとしてあげられ

る。また、事後の面接調査では、全体として防衛的な発言が多くなり、実際にはその時にどのように考えていたのかが不明のままに終わるという結果となっている。

さらに、課題を解かせるという方法を用いており、なおかつ観察下にあるために、普段とは異なる反応をしているとも考えられる。本来なら、途中で止めてしまったであろう例もいくつかみられたからだ。

このような問題点もあったが、この調査は次のようなことを示唆している。それは、現在の多くの図書館の OPAC で探索する学生、大学院生のかなりの部分が探索に失敗しているであろうということである。なぜなら、OPAC の使用経験がある程度ある被験者を選んだのにも関わらず、課題の回答ができなかった被験者が存在するからである。

2. 先行研究とその特徴

これまでの OPAC に関する利用調査をまとめると、第 1 表のようになる。

Borgman ら⁸⁾ は、4 つのバージョンの Science Library Catalog (SLC) を使用し、9 歳から 12 歳の子どもを対象に検索実験を行っている。SLC はキーボードではなくマウスで入力するシステムなので、タイピングの技術やスペルミスなど、キーボードによる OPAC の典型的な問題点を克服している。しかし、探索主題がどの階層に位置するのかが分かりにくいとき、失敗する確率が高いことが明らかになった。

Millsap ら⁹⁾ は、コマンド方式である MELVYL を使用し、遠隔ユーザーを対象にした利用調査を行っている。トランザクション・ログの分析を行い、利用上の問題点を挙げている。コマンドを正確に入力することや、適切な量の検索結果が得られるような検索語を選択すること、さらに適切なデータベースを選択することが問題となった。

Solomon¹⁰⁾ は、小学校の図書館における OPAC の探索行動を調査している。この結果、子どもの能力の変化について、必要な利用者援助は利用者の能力に応じて変わる点や、ある主題分野

について詳しくなると、情報検索システムへの要求内容も変わる点を明らかにしている。

Chen¹¹⁾ は、高校生を対象に OPAC の探索行動実験を行っている。課題を与えて適合する文献を探索させるという方法をとっているが、高校生の情報検索技術のほかに、言語能力の問題についても論じている。課題文から主要概念を読みとり、検索に有効なキーワードを選ぶ力がないため、課題に書いてある質問を一語一句そのまま入力してしまう例も見られた。その他にも、検索結果の中から適合文献を選びだす読解力がないことが指摘されている。

Hunter¹²⁾ は、コマンド入力方式の Bibliographic Information System (BIS) を使用したトランザクション・ログの分析を行い、検索における大きな問題を 2 つ挙げている。まず 1 つは、主題探索における統制された語彙についてである。もう 1 つは、姓名の順を逆に入力したり、タイトルをイニシャルで入力したりすると探索に失敗するといった操作についての問題である。この調査における探索の失敗率は 54.2% にもなり、探索があまりうまく行われていないことが明らかになった。

それではここで、これまでの OPAC に関する利用調査を全体的に見てみよう。第 1 表からは、次のようなことが言えるであろう。

- (1) 大学図書館における調査が多い。
- (2) 調査に使用した OPAC は、キーボード入力がほとんどである。
- (3) 調査方法は、トランザクション・ログ分析からインタビューへと移行してきている。
- (4) 主題探索と既知文献探索のどちらが多いかは、一概には言えない。
- (5) 検索の失敗要因として多いのは、検索語のつづりの間違いや選び方である。

以上のような点を考慮し次のような調査を行うことにした。

- (1) トランザクション・ログよりも利用者の印象や意見を引きだせる面接調査
- (2) 既知文献探索だけでなく、主題探索に関する実態を明らかにできる調査。

第1表 OPAC調査の先行研究

研究者	Wildemuth 他	Borgman 他	上田他	Millsap 他	Solomon	Chen	Hancock-Beaulieu	Hunter	
発表年	1995	1995	1994	1993	1993	1993	1991	1991	
1. 調査場所									
小学校の図書館		○			○				
高校の図書館						○			
大学図書館	○		○	○ (遠隔)			○	○	
2. 使用した OPAC									
キーボード入力	—		○	○	○	○	—	○	
マウス入力	—	○					—		
コマンド方式	—			○			—	○	
画面埋め込み方式	—		○		○		—		
3. 分析の方法									
アンケート	○						○		
インタビュー	○	○	○		○				
発話			○		○				
観察			○		○	○			
トランザクション・ログ				○	△ (ビデオ)		○	○	
4. 探索のタイプ									
主題探索	36.0%	—	—	20%	—	—	53.6%	34.2%	51.8%
既知文献探索	64.0%	—	—	—	—	—	35.4%	37.0%	47.2%
混合	—	—	—	—	—	—	11.0%	24.9%	1.0%
課題を与えた実験		○	○			○			
5. 成功率	70.0%	—	—	—	66%	65.3%	—	46%	
6. 失敗要因									
つづりの間違い			—	○	○	○	—	○	
検索語の選び方			—	○	○	○	—	○	
コマンドの入力方法			—	○		○	—		
不正確な情報	○		—				—		
階層の位置づけ		○	—				—		

(3) 課題を与えて検索のやり方を観察するという調査方法ではなく、自然な環境下で行う調査。

II. 大学図書館における OPAC 利用者調査

A. 調査の目的と内容

1. 調査の目的

現在、図書館において OPAC の利用が主流と

なっているが、必要な文献を検索するとき多くの問題に直面する。実際に、大学図書館では、OPAC を利用するより、直接書架へ行きブラウジングする学生も多い。そこで、OPAC や検索の知識のない学生にとって、OPAC を利用する際に、何が常識となっており、何が分かりにくいのかを明らかにするため、以下の調査を行う。

2. 調査の内容

- (1) OPAC 利用者の属性 (学部・学年・性別)
- (2) 図書館および OPAC の利用頻度
- (3) OPAC の使用法を教わった経験の有無
- (4) 探索の目的
- (5) OPAC についての印象と要望・意見
- (6) 探索のタイプ

この探索のタイプについては、主題探索と既知文献探索のどちらが多いのかを調査し、さらに、それぞれの探索タイプについて、次のような点を明らかにする。

- (a) 主題探索 探索語、文献の選定に用いる項目、探索結果の満足度、その後の行動
- (b) 既知文献探索 アプローチの仕方、書誌事項の情報源、探索の成功・不成功、探索不成功後の行動

B. 調査の方法と手順

1. 面接調査の方法

これまでの多くの OPAC 利用者調査は、調査者から被調査者に対して課題を与えて検索させる形をとっている。しかしこの方法では、被験者はその課題を解いている過程を観察されるために、観察者を意識した行動をとりがちである。このような観察下では、本来なら OPAC での検索を止めているはずなのに、無理に回答しようとする傾向もみられる。そこで、通常の状態 OPAC をどのように使っているかを把握するため、OPAC の使用直後、その利用者に面接調査を行うという方法をとることにした。

2. 質問項目

OPAC 利用者の背景、探索のタイプ、探索の仕

方についての情報収集を中心に質問項目を決めた。

従来の調査では、探索のタイプを利用者の手付き (著者名、書名、件名) によってカテゴリー分けする方法がよく見受けられるが、このような分け方では探索の意図や目的が考慮されていないので、適切なものとはいえない。

三浦逸雄らによるカード目録利用行動の調査¹³⁾では、探索意図・目的を踏まえた次の 4 つの探索タイプを設定している。

- (1) 既知文献探索: 利用者が既にその存在を知っている特定の文献の所蔵または (および) その配架位置を知るための探索。
- (2) 主題探索: 特定の主題に関する文献を求め、図書館が適切な文献を所蔵していれば、その配架位置を知るための探索。
- (3) 書誌的探索: 特定文献そのものを利用するのではなく、その書誌事項を OPAC によって確認するための探索。
- (4) 選択的探索: 特定の著者名または叢書名等から図書館所蔵の文献を確認し、その中から必要とする文献を選択するための探索。

しかし、実際の調査では、書誌的探索は 1 件にすぎず、選択的探索においても全体の 7.1% のみであった。そこで今回の調査では、既知文献探索と主題探索に大きく分け、既知文献探索をさらに次の 3 つに分類した。

- (1) 著者名と書名が既知の資料の探索
- (2) 著者名だけ既知の資料の探索
- (3) 書名だけ既知の資料の探索

また、既知文献探索の場合にはアプローチに焦点をあて、主題探索の場合には探索語に重点をおいた。

3. 予備調査

質問項目案を用いて、被調査者の協力度、探索タイプの適切さ、質問の構成、ワーディング、面接調査技術などに留意し、1997 年 7 月 9 日と 10 日の 2 日間にわたり、慶應義塾大学日吉メディア

センターで、OPAC 利用者 50 名に面接調査を試みた。予備調査の結果、1 年生から 4 年生までが利用している大学図書館、あるいは 3, 4 年生が主に利用している大学図書館で本調査を実施することにした。

さらに、この予備調査の結果を検討して、いくつかの質問を追加し、ワーディングを修正し、最終的な質問項目を決めた（付録参照）。

4. 本調査

調査は、1997 年 10 月に早稲田大学中央図書館と明治大学中央図書館にて行った。調査日時と時間帯それに回答者数などを第 2 表に示す。

なお、調査を実施する場所は、都内で学生数と学部数の多い大学図書館を条件としたが、その中から両大学の図書館で調査の協力が得ることができた。また、大多数の大学図書館は、コンピュータメーカーのパッケージソフトを使っている。早稲田大学では IBM を、明治大学では富士通を使用しているが、両大学の OPAC システムがシステムとして標準的であるだろうと判断した。

a. 早稲田大学中央図書館

(1) WINE システム

早稲田大学図書館では、1984 年 10 月より、WINE システム (Waseda university Information NETwork system) を開発、導入している。このシステムは、早稲田大学図書館等で受け入れた資料（図書および雑誌）の目録（書誌ならびに

所在）情報をデータベース化して検索できるようになっている。

(2) 検索項目

WINE の検索項目には、次の 9 つがある。

- ① 著者名等（西洋人名はアルファベットで入力しなければならない）
- ② タイトル
- ③ 件名（『国立国会図書館件名標目表』を採用）
- ④ 出版者
- ⑤ 分類（『日本十進分類法』を採用）
- ⑥ ISBN/ISSN
- ⑦ その他の番号等
- ⑧ 請求記号
- ⑨ BOOK-ID この中で学生が主に使用しているのは、①著者名等、②タイトル、③件名である。

(3) 基本的な操作方法

初期メニュー画面で「1 情報検索」を選択し、〔実行〕キーを押すと、検索項目を選ぶ画面が出てくる。選択した数字を入力し、実行キーを押すと、検索語を入力する画面に変わる。ひらがなでもカタカナでもよいが入力し、〔実行〕キーを押すと、次の画面でその結果がリストになって表示される。検索結果表示画面で詳細を見たい資料の番号を入力し、〔実行〕キーを押すと、詳細書誌画面に変わり、その資料について、出版者、著者、分類、ページ、図書に含まれる内容などが表示され

第 2 表 調査日時と調査件数

調 査 館	調査日時	同意	拒否	計
早稲田大学 中央図書館	1997 年 10 月 2 日 (10:30~17:10)	35 76.1%	11 23.9%	46 100.0%
	1997 年 10 月 3 日 (11:25~17:05)	40 93.0%	3 7.0%	43 100.0%
明治大学 中央図書館	1997 年 10 月 7 日 (10:00~16:45)	40 80.0%	10 20.0%	50 100.0%
	1997 年 10 月 9 日 (10:45~16:45)	45 88.2%	6 11.8%	51 100.0%
計		160 84.2%	30 15.8%	190 100.0%

る。画面の下方には「所在」という欄があり、配架場所と請求記号が示されている。

(4) 情報検索の応用操作

WINE では、前方一致や検索結果の保存によって文献の集合を作り、条件による検索結果の限定もできるようになっている。しかし、これらの操作は複雑なので、一般に学生は使用していないようである。

(5) OPAC の利用環境

調査を実施したのは中央図書館の2階であったが、OPAC が8台ほど並べられているコーナーの他に、1台か2台のOPAC が置かれた机がフロアに2,3箇所設けられている。レファレンス・カウンターは同じフロアにあるものの、これらのOPAC はカウンターの近くにはないため、図書館員への質問がしにくい環境である。所蔵している資料の中で、一般図書・参考図書はすべてWINE に収録されているが、研究図書などの一部はカード目録を使って検索できるようになっている。また、WINE はインターネットからも接続することができ、遠方からの利用が可能である。

b. 明治大学中央図書館

(1) LISM-IR(fs)

明治大学図書館では、1993年度から、情報検索システム LISM-IR (fs) (Library Information System of Meiji university-Information Retrieval system-full screen) の開発を続けてきており、1994年後半にバージョン・アップし、応答速度の改善を実現した。

(2) 検索項目

LISM-IR(fs) には、以下のような11の検索項目がある。

- ① 書名
- ② 著者等
- ③ 出版者
- ④ 件名 (『国立国会図書館件名標目表』を採用)
- ⑤ 分類 (『日本十進分類法』を採用)
- ⑥ キーワード (書名、著者、件名を一度に検索し、いずれかにヒットすれば検索結果になる)

⑦ 請求記号

⑧ 出版年

⑨ ISBN/ISSN

⑩ 登録番号 この中で学生が主に使用しているのは、①書名、②著者等、⑥キーワードの3つである。

(3) 基本的な操作方法

検索を始めるには、初期画面でまず〔PF6〕キーを押す。すると、検索キー入力画面に変わり、検索したい単語を入力できるようになっている。該当する部分に検索語を入力し、該当する資料があると、「ヒット件数」の数字が変わり、〔PF4〕キーを押すと、一覧表示画面に移る。

さらに所蔵事項など詳細な項目を見る場合には、表示したい番号を入力し、〔実行〕キーを押すと、詳細書誌画面に変わり、その資料について、著者、出版事項、明大分類、件名などが表示される。画面の下方には「所蔵事項」という欄があり、配架場所と請求記号が示されている。

書名と著者など、複数の項目を組み合わせで検索するには、「書名」と「著者等」の両方に入力すればよい。通常コマンドを使う必要はないが、SEARCH, AND, OR などの検索コマンドでも検索できる。やや特殊な検索をする場合に使うだけなので、学生はほとんど使用することはない。

(4) OPAC の利用環境

明治大学中央図書館では、入ってすぐ右側にオンライン目録コーナーが設けられており、20台ほどの端末が利用できるようになっている。その近くには貸出カウンターがある。所蔵している資料の中で、1988年4月以前に受け入れた資料はカード目録が作成されており、それ以降の資料はすべてOPACで検索できるようになっている。また、OPACシステムは明治大学図書館のホームページ上に公開されており、誰でもアクセスできる。

c. 両大学の OPAC の相違点

早稲田大学の OPAC と明治大学の OPAC の相違点は以下の通りである。

(1) 早稲田大学の OPAC では、「m 他館情報」「f 次項」などのようにアルファベットの

コードで操作するが、明治大学の OPAC では、〔PF キー〕を用いて操作する。

(2) 明治大学の OPAC は画面埋め込み方式のため、画面を変えなくても複数のフィールドに入力が可能で、複合検索が簡単に行う。一方、早稲田大学の OPAC は複合検索が難しい。

(3) 著者名等を入力する場合、早稲田大学の OPAC では、姓名の順で、漢字入力時以外には姓と名の間にカンマが必要である。明治大学の OPAC では、著者名の順を問わない。

両者にはこのような相違点はあるものの、調査に影響を及ぼすほどの大きな差はないとみなした。

3. 本調査の調査方法

OPAC 利用者に対して OPAC を使用した直後、質問票に基いて、3～5 分程度の面接調査を行う。

C. 調査結果

調査の結果は以下の通りである。前述のように早稲田大学と明治大学の OPAC システムの相違を考えず、両大学を集計した。

1. 面接調査件数

第 2 表にみられるように、本調査において面接調査のために声をかけたのは 190 名である。そして、同意を得たのは 160 名、同意が得られなかったのは 30 名であった。拒否の理由は、ほとんどが「今は時間がない」という答えであり、利用者は総じて面接調査に協力的、好意的であった。

2. 面接調査に同意した利用者の構成

面接調査に同意した OPAC 利用者の学年別の比率は第 3 表、学部別の比率は第 4 表の通りである。明治大学中央図書館は、主な図書館利用者が 3, 4 年生であるため、この調査でも約 91.8% を占めている。また、早稲田大学中央図書館、明治大学中央図書館ともに、主に文系学部を対象にしている図書館なので、文学部や政治経済学部、商学部などが大きな割合を占めている。性別について

第 3 表 学年別

学 年	人 数	比 率
1 年生	15	9.4%
2 年生	15	9.4%
3 年生	54	33.8%
4 年生	65	40.6%
大学院生	6	3.8%
その他	5	3.1%
計	160	100.0%

注：その他は早稲田大学の 5, 6 年生

第 4 表 所属学部別

学部	早稲田大学	明治大学	計	比率
文学部	22	29	51	31.9%
政治経済学部	14	15	29	18.1%
商学部	10	18	28	17.5%
法学部	4	7	11	6.9%
教育学部	19		19	11.9%
経営学部		14	14	8.8%
その他	2	6	8	5.0%
計	71	89	160	100.0%

第 5 表 図書館と OPAC の利用頻度

利用頻度	図書館		OPAC	
	人数	比率	人数	比率
毎日	8	5.0%	5	3.1%
週 3～4 回	36	22.5%	22	13.8%
週 1～2 回	69	43.1%	65	40.6%
月 2～3 回	26	16.3%	34	21.3%
月 1 回以下	21	13.1%	34	21.3%
計	160	100.0%	160	100.0%

では、男性が 105 名 (全体の 65.6%)、女性が 55 名 (同 34.4%) という結果となった。

3. 図書館利用の頻度

OPAC の利用者が図書館を利用している頻度は、第 5 表の通りである。週 1～2 回の比率が最も多く、次いで、週 3～4 回の比率が多くなっている。通常は月 2～3 回しか図書館を利用していないが、試験前になると、週 3～4 回利用すると答える学生もいた。

大学図書館における OPAC の利用者の探索行動

第 6 表 OPAC の利用目的

利用目的	1 年	2 年	3 年	4 年	計	比率
クラスの宿題	3	7	11	10	31	20.1%
クラスに関連した読書(宿題以外)	1	1	2	2	6	3.9%
ゼミ・研究会	1		29	6	36	23.4%
卒業論文			4	43	47	30.5%
サークル活動	1	1	1		3	1.9%
自分の関心	10	6	11	4	31	20.1%
計	16	15	58	65	154	100.0%

4. OPAC の利用目的

利用者には、過去の経験をもとに OPAC の利用目的を尋ねたのではなく、個々の探索についての目的を尋ねた。第 6 表にみられるように、卒業論文が 56 件 (33.7%) で最も多く、次いでゼミ・研究会が 37 件 (22.3%) という結果であった。しかし、この結果は、面接調査に同意した利用者の各学年の人数に大きく影響されている。1 年生は「自分の関心」、2 年生は「クラスの宿題」、3 年生は「ゼミ・研究会」、4 年生は「卒業論文」、また人数は少ないものの、5、6 年生は「卒業論文」、大学院生は「修士論文」を主な目的として OPAC を利用していた。各学年の特性が明確にうかがえる結果となっている。

5. 探索のタイプ

全探索をタイプ別に集計した結果が第 7 表である。主題探索が 64 件で 38.6%、既知文献探索が 102 件で 61.4% を占め、本調査では既知文献探索をしている利用者の方が多く結果となった。また、どの探索タイプにおいても、ほとんどの学生が雑誌よりも本を探索している。なお、166 件のうち、本と雑誌の両方を探していたケースは 11 件、雑誌のみを探していたケースはわずか 2 件である。学年別に各探索タイプには相違が認められる。1、2 年生は、自分が関心をもった本や授業での課題図書を求めており、あらかじめ著者名と書名の両方を既知知っている場合が多い。そのため、既知文献探索が最も多い。一方、3、4 年生は、ゼミや卒業論文のために必要な文献を求めており、まだどのような文献があるのかを知らな

第 7 表 探索のタイプ

上段: 人数 下段: 比率

タイプ 学年	件数				計
	主題 探 索	既知文献探索			
		両方	著者名	書名	
1 年生	2 12.5%	8 50.0%	2 12.5%	4 25.0%	16 100.0%
2 年生	5 33.3%	6 40.0%	2 13.3%	2 13.3%	15 100.0%
3 年生	22 37.9%	17 29.3%	7 12.1%	12 20.7%	58 100.0%
4 年生	31 47.7%	15 23.1%	14 21.5%	5 7.7%	65 100.0%
5・6 年生	3	3	0	0	6
大学院生	1	3	0	2	6
計	64 38.6%	52	25	25	166 100.0%
			102 61.4%		

い場合が多い。そのため主題探索が多くなっている。

III. OPAC 利用者のタイプ

A. 主題探索

1. アプローチの仕方と探索語

面接調査では、利用者の求めている主題について質問し、さらに探索の際に手がかりに使った利用者の語を記録した。

まず、アプローチの仕方であるが、主題探索の場合、第 8 表のように、両大学とも件名でアプローチするより、書名の項目に語を入力して探す

というケースが多数を占めていた。明治大学においては、書名、著者、件名を一度に検索し、いずれかにヒットすれば検索結果になるという「キーワード」を入力して探すというケースが、書名アプローチよりも多かった。

使用探索語の数については、早稲田大学では、探索語を1語だけ用いたケースが66.7%を占めているのに対し、明治大学では40.5%にとどまり、2語用いたケースも35.1%という割合を占めた。これは、明治大学のOPACの画面が埋め込み方式のため、同時に2語以上の項目に入力しやすいということがあるからであろう。

探索語をどのようにして得たのかを調べたところ、テーマである語をそのまま使っている例がほとんどであった。例えば、ゼミで必要な「民族紛争」というテーマの文献を探していた学生は、「民族紛争」という語をそのままキーワードの欄に入力していた。

2. 文献の選択

語を入力して検索結果を得た場合、次に何を基準にして適切な文献を選びだすかを調べた結果が第9表である。最も多いのは書名による選択であり、次に多いのは、出版年による選択であった。

第8表 入力したフィールドと入力語数（主題探索）

入力フィールド	早稲田大学		明治大学	
	件数	比率	件数	比率
著者名	1	3.4%	2	4.7%
書名	17	58.6%	17	39.5%
件名	10	34.5%	3	7.0%
出版者	1	3.4%	1	2.3%
キーワード	—		20	46.5%
計	29	100.0%	43	100.0%
入力語数	件数	比率	件数	比率
1語	18	66.7%	15	40.5%
2語	6	22.2%	13	35.1%
3語	2	7.4%	8	21.6%
4語	1	3.7%	1	2.7%
計	27	100.0%	37	100.0%

なお、「その他」には所蔵場所、注記、国名が含まれている。書名を見て適切な文献であると判断しても、他の校舎にある図書館にだけ所蔵していることが分かると、入手をあきらめるという学生もいた。

明治大学では、文献の選択基準に合わせて、多数の検索結果がある場合に何件までなら見るのかという質問も行った。その結果、100件までという回答が最も多く、13名であった。20件まで、50件まで、200件までと答えた学生は各4名いた。ただし、これは検索によってこの件数まで絞り込むということではなく、検索結果画面の後半を見ないということの意味する。新たな探索語を入力して検索件数を絞るという方法はほとんどとられていない。

3. 探索結果の満足度

文献を実際に入手する前に、OPACでの検索結果についてどれほど満足しているかという質問をした。その結果が第10表である。

第9表 文献の選択理由（主題探索）

選択理由	件数	比率
書名	50	48.5%
出版年	23	22.3%
著者名	13	12.6%
言語	8	7.8%
出版者	3	2.9%
請求番号	1	1.0%
その他	5	4.9%
計	103	100.0%

第10表 探索結果の満足度（主題探索）

満足度	早稲田大学		明治大学	
	人数	比率	人数	比率
とても満足	6	22.2%	7	18.9%
ある程度満足	10	37.0%	12	32.4%
見つからず不満	3	11.1%	14	37.8%
見つけたが不満	4	14.8%	3	8.1%
その他	4	14.8%	1	2.7%
計	27	100.0%	37	100.0%

大学図書館における OPAC の利用者の探索行動

検索結果にはある程度満足しつつも、他にもっと良い資料があるはずと思っている主題探索者が、早稲田大学では 37%，明治大学においても 32% を占めている。ある程度の満足を得た探索者と適切とみられる資料が見つかって満足している探索者とを合わせると、早稲田大学では 59%，明治大学では 51% を占め、半数以上の主題探索者は満足する検索結果を得ていることになる。

一方、欲しいと思う資料が見つからず不満に思っている主題探索者は、早稲田大学では全体のわずか 11% であったが、明治大学では 38% にものぼる。主題探索に慣れていない学生はかなり多く存在するとみられる。これらの利用者は複数のアプローチをした例もあるが、書名からのアプローチが最も多い。明治大学においては、「キーワード」からアプローチしたケースが最も多いが(第 8 表)、求めている資料が見つからず不満と答えた主題探索者の中では、書名を入力したものが「キーワード」に入力して探したというものよりも多い。

また、OPAC の検索結果では適切な文献が見つかったが、貸出中であったり、所蔵場所が他の校舎であったりして、すぐ入手できそうにないというケースも 7 件あった。その場で入手できなければ、検索結果は役立たないとみなされる傾向が強い。

なお、「その他」の内容は、「実際その資料を見

てみないと分からない」や「もともと資料の少ない分野なので、満足でも不満足でもない」というものであった。

4. 探索後の行動

OPAC による探索の後の行動は、第 11 表にみられるように、OPAC で見つかった資料を実際に手にとって確認するために、「書架に行く」が大部分を占めている。

探索結果の満足度の質問で、「欲しいと思う資料が見つからず、不満」と回答した学生 17 名に限ってみても、探索後の行動として最も多いのは、「書架に行く」(8 件)であった。しかし、これは見つかった資料を手にとって確認するためではなく、書架で直接に適切な資料を探すためである。OPAC では、これ以上の検索をすることができず、あきらめて書架を直接に探そうとしていると考えられる。そのほうが簡単であると認識されている。「他の図書館へ行く」が 3 名、「書店へ行く」も 2 名いる。他の行動の場合よりこのケースの比率がより低いのであれば、特定文献を求める既知文献探索とは異なる主題探索の特性を反映しているとみることができよう。

同じく、探索結果の満足度の質問で、「4 よさそうな資料が見つかったが、すぐ入手できそうにない、不満」と回答した学生 7 名の探索後の行動は、「書架に行く」が 3 名、「他の図書館へ行く」

第 11 表 探索後の行動

探索後の行動	主題探索		見つからず不満		見つかったが不満	
	件数	比率	件数	比率	件数	比率
書架に行く	42	60.0%	8	47.1%	3	37.5%
参考図書で調べる	3	4.3%	—	—	—	—
教師にきく	3	4.3%	1	5.9%	—	—
図書館員にきく	5	7.1%	1	5.9%	1	12.5%
友人にきく	—	—	—	—	—	—
他の図書館へ行く	5	7.1%	3	17.6%	2	25.0%
書店へ行く	5	7.1%	2	11.8%	1	12.5%
あきらめる	—	—	—	—	—	—
特に決めていない	2	2.9%	1	5.9%	—	—
その他	5	7.1%	1	5.9%	1	12.5%
計	70	100.0%	17	100.0%	8	100.0%

が2名、「書店へ行く」が1名であった。また、「その他」を選び、「違う探索語を考えてきて、後日OPACでまた調べてみる」と答える例もあった。

探索後の行動の「その他」には、他にも、「よさそうな資料が生田校舎の図書館に所蔵しているのなので、図書館員に取り寄せてもらうように頼んでみる」(明治大学生)というものがあつた。

B. 既知文献探索

1. 手がかりとアプローチの仕方

探索以前に利用者の持っていた情報は第12表の通りである。OPACを利用する前に著者名と書名の両方を知っていた52件のうち、探索の手がかりとしてどちらを選択したかは第13表に示されている。書名を選択したのは59.6%、著者名を選択したのは32.7%であり、既知文献探索においても、利用者は書名アプローチを好む傾向がみられる。著者名と書名の両方を知っていて、両方とも入力した場合、検索結果を得るのに時間を要したり、ヒットしなくなるといった問題を抱えることになるが、このような例も4件あつた。

第12表 探索文献に関する情報(既知文献探索)

手がかり	件数	比率
著者名と書名	52	51.0%
著者名のみ	25	24.5%
書名のみ	25	24.5%
計	102	100.0%

なお、今回の調査では、既知文献探索において件名アプローチをした学生はまったく見られなかった。

2. 探索文献の情報源

第14表は、探している文献をどのようにして知ったのかを示している。探索文献の情報源で多かったのは、「教師の紹介(リーディング・リストを含む)」と「図書等の参考文献・注」である。レポートやゼミの課題では、教師の紹介で文献のことを知った例が多く、卒論や修論では、読んでいた図書の参考文献や注を見て文献の情報を得た例が多い。

「その他」では、探している文献が映画の原作や原書の訳本、続編の本であると答えていた。また、有名な本なのでどのようにその本を知ったのか覚えていないと答える学生が2名いた。

第13表 アプローチ別の探索結果(既知文献探索)

アプローチ	成功	不成功	計
著者名	38 90.5%	4 9.5%	42 100.0%
書名	49 87.5%	7 12.5%	56 100.0%
両方	4 100.0%	0 0.0%	4 100.0%
計	91 89.2%	11 10.8%	102 100.0%

第14表 探索文献の情報源(既知文献探索)

文献の情報源	1年生	2年生	3年生	4年生	計	比率
教師の紹介	5	4	14	12	35	33.7%
参考文献・注	3	2	11	12	28	26.9%
書誌	0	0	3	5	8	7.7%
書評	1	0	1	1	3	2.9%
以前OPACで	0	0	2	0	2	1.9%
以前図書館で	0	1	0	1	2	1.9%
友人・先輩	1	0	2	4	7	6.7%
広告・書店	2	1	3	0	6	5.8%
その他	2	2	1	1	6	5.8%
計	14	10	37	36	97	93.3%

大学図書館における OPAC の利用者の探索行動

3. 探索の成功・不成功

OPAC 利用後に探している文献を入手できたかどうかということは、本調査の範囲外であるため、ここでいう探索の成功とは、探している文献が OPAC による検索結果中に見つかった場合に限定している。探索者は特定の文献を求めているので、文献を手にとって確認したり、選定したりする必要はなく、探索時点で成否を決定できる。これは利用者の立場に立った判断であると言えるだろう。よって探索の不成功とは、OPAC の検索結果の中に求めている文献が見出せなかった場合であるが、既知文献探索 102 件のうち、成功は 91 件、不成功は 11 件であった。アプローチ別の探索結果は第 15 表のようになる。成功率は、著者名アプローチの方が書名アプローチを若干上回った。

4. 探索不成功後の行動

探索が不成功であった後の行動は一様ではないが、不成功だった探索者 11 名中 1 名を除き、引き続き求める文献を入手するための努力がみられた。書店に行くものが 3 名、図書館に購入を希望する、他の図書館へ行く、代わりの本を見付けるがそれぞれ 2 名であり、「あきらめる」ものは 1

第 15 表 アプローチ別探索結果（既知文献探索）

アプローチ	成功	不成功	計
著者名	38 90.5%	4 9.5%	42 41.2%
書名	49 87.5%	7 12.5%	56 54.9%
両方	4 100.0%		4 3.9%
計	91 89.2%	11 10.8%	102 100.0%

第 16 表 OPAC の利用頻度と利用法の習得

		毎日	週 3~4 回	週 1~2 回	月 2~3 回	月 1 回以下	計
OPAC の 使い方を教 わった経験	ある	2 2.7%	14 18.7%	27 36.0%	17 22.7%	15 20.0%	75 100.0%
	ない	3 3.5%	8 9.4%	38 44.7%	17 20.0%	19 22.4%	85 100.0%
何を通じて 教わったか	授業		2 14.3%	6 42.9%	5 35.7%	1 7.1%	14 100.0%
	図書館の セミナー	1 2.7%	8 21.6%	13 35.1%	7 18.9%	8 21.6%	37 100.0%
	友人・先輩	1 5.0%	3 15.0%	9 45.0%	2 10.0%	5 25.0%	20 100.0%
	マニュアル		1 20.0%		3 60.0%	1 20.0%	5 100.0%
	その他				1 100.0%		1 100.0%
コンピュータ の利用経験	ある	3 2.7%	21 18.8%	49 43.8%	21 18.8%	18 16.1%	112 100.0%
	ない	2 4.2%	1 2.1%	16 33.3%	13 27.1%	16 33.3%	48 100.0%
計		5 3.1%	22 13.8%	65 40.6%	34 21.3%	34 21.3%	160 100.0%

名だった。不成功の事例は少なく、とりたてて傾向を見出すことはできない。

C. OPAC の利用頻度と利用の特色

1. OPAC の使い方を教わった経験

OPAC の利用頻度であるが、第 5 表のように、週 1～2 回利用する学生が 65 名と最も多かった。図書館を利用する際はいつも OPAC を利用していると答える学生が何名もいたが、「図書館利用の頻度」と比べると、OPAC の利用頻度は若干低くなっている。

次に、OPAC の使い方を教わったことがあるかどうかと尋ねた結果を、OPAC の利用頻度別にまとめてみると、第 16 表のようになる。教わったことのある学生の数が、ない学生よりも上回っていたのは、OPAC を週 3～4 回利用している層だけであった。毎日 OPAC を利用している層は、教わったことのない学生の方が若干多かったが、これは特に使い方を教わらなくても、毎日使うことにより、次第に操作に慣れていくと考えられる。

さらに、OPAC の使い方を教わったことのある学生に、何を通じて教わったのかを尋ねた。最も多かったのは、図書館で行っている OPAC セミナーに参加した学生であった。このセミナーに参加して、基本的な操作が理解できてよかったと感想を付け加える学生もいた。次に多かったのは、友人や先輩に使い方を教わった学生である。これは、OPAC を使っていて、分からないことがあ

たとき、一緒にいた友人や先輩に聞いたというものである。授業で教わった学生は 14 名であるが、これは主としてゼミのクラス単位で図書館員が行ったセミナーに参加したというケースである。

次に、パソコンやワープロを普段から使っているかどうかを尋ねた。どの利用頻度の層においても、コンピュータを利用している学生の方が使っていないものよりも多かったが、週 3～4 回 OPAC を利用している学生は、コンピュータを利用している比率が最も高く、OPAC の利用頻度が低くなるほど、コンピュータを使用している比率も低くなっていると言える。

2. OPAC の印象

面接調査では、OPAC の使いやすさについて 4 つの選択肢で答えさせた。第 17 表の通り、全体的にみても、「2 全体としては利用しやすいが、利用しにくいところもある」が 75 名 (46.9%) と最も多く、次いで「1 利用しやすい」が 52 名 (32.5%) であった。また、「3 利用しにくい」は 22 名で、全体の 13.8% にあたる。

IV. OPAC の利用上の問題点とその改善策

A. OPAC 利用上の問題点

利用者は OPAC を「何か語を入力すれば、自分の求めている文献が検索結果として出てくるもの」としてとらえている。OPAC を使いはじめた頃は操作の仕方などがわからずに困ることもある

第 17 表 OPAC の使いやすさ

	毎日	週 3～4 回	週 1～2 回	月 2～3 回	月 1 回以下	計
使いやすい	1 1.9%	6 11.5%	20 38.5%	15 28.8%	10 19.2%	52 100.0%
全体としては使いやすいが、 使いにくいところもある	3 4.0%	13 17.3%	35 46.7%	13 17.3%	11 14.7%	75 100.0%
使いにくい	1 4.5%	1 4.5%	9 40.9%	5 22.7%	6 27.3%	22 100.0%
何ともいえない		2 18.2%	1 9.1%	1 9.1%	7 63.6%	11 100.0%
計	5 3.1%	22 13.8%	65 40.6%	34 21.3%	34 21.3%	160 100.0%

が、使っていくうちに次第に慣れていく。つまりその仕組みを学習していく。

1. 主題探索

学生が理解しにくいとらえているのは、主題探索に関する事柄である。あるテーマについての文献を探るとき、どのようなキーワードを入力すればよいかわからないという学生が多い。

例えば、「あるテーマについての資料を探す方法がよくわからないので、著者名や書名がわかっている時にしか利用していない」、「簡単に本が探せるが、あるテーマについての資料を探るとき、大きい分野ではどのような語を入力したらよいかかわからない」、「書名の欄に入力するとヒットするのだが、件名の欄に同じことばを入力しても検索されない」、「件名を使った探し方がわからない」などの反応がみられた。特に、探しているテーマが広い場合に戸惑うことが多い。

また、検索項目の種類についても理解が十分でない学生が比較的多い。検索項目として画面上に分類や ISBN などと表示されているが、利用者は件名と分類あるいはキーワードとではどのように違うのかということに疑問を抱いている。例えば、「キーワードと件名の違いがわからない」（明治大学）という利用者がいる。

その他、「複数の情報を入力して検索する方法がわからない」（早稲田大学）など複雑な検索機能についても知りたいと思っている学生が少数ではあるがみられた。

多くの利用者が誤解しているのは、検索語の照合の仕組みである。早稲田大学においも明治大学においても、タイトル中から任意の単語を入力すれば、検索されるようになっている。しかし、使いはじめて3年経つ学生も完全一致でないとヒットしないと誤解をしていた。

2. 入力の方法

OPAC を利用する際には、検索の方法よりもキーボード操作で苦勞している学生が多い。例えば、検索語をひらがなの全角で入力したいとき、半角の英文字モードになっている場合にモードを

切り換える必要があるが、英文字からひらがなモードへ、さらに半角から全角へ、という切り換えが複雑であり、利用者は難しいと思っているようである。全角になっていなければ、入力しようとしてもカーソルが動かないために、それ以上の操作をあきらめてしまった例もある。このモードの切り換えができないと、書名や著者名を正確に入力することができないので、検索の失敗を招くことになる。

著者が西洋人名の場合、原綴で入力する必要があることは、利用者には理解されていた。しかし、正確な綴りがわからず、検索に失敗するということが多くみられるようである。

3. 検索結果の見方

以上のような困難を乗り越え、検索できたとしても、まだわかりにくいことがある。それは、検索結果の見方である。つまり、OPAC 画面に表示された詳細情報の読み方がわからないという学生がいる。例えば、調査中に、請求記号が OPAC 画面のどこに書いてあるのかを質問してきた学生がいた。また、ヒットした文献が書架のどこに置いてあるのかということもわかりにくいようである。所蔵場所の見方を十分に説明する必要があるだろう。

B. OPAC の改善に向けて

1. OPAC の検索画面

前述したような利用上の問題点の中で、検索項目などは、利用マニュアルに説明されている。しかし、学生は利用マニュアルを読むことはほとんどない。従って、OPAC の検索画面は、利用マニュアルを見なくても使えるような単純なものにする必要がある。

例えば、初期画面の検索項目は、利用者がよく利用するものだけに限れば、理解しやすくなる。一般に、検索項目として著者名等と書名が最も多く使われている。そして今回の調査の結果、この2つの項目に加え、早稲田大学では件名が、明治大学ではキーワードがよく使われており、その他の項目はほとんど使われていないことがわかっ

た。このように、検索項目が豊富であっても使用されないものがほとんどである。「分類」や「ISBN」などの項目は、「件名」とどのように違うのかなどというように、かえって学生を混乱させているのが現状である。

今回の調査は、2つの大学図書館において実施したため、異なったOPACシステムを用いている。両者には調査結果に大きな影響を及ぼすほどの大きな差はないと言えるが、両者を比較してみると、学生にとっては、明治大学で採用している画面埋め込み方式の方が使いやすいと言えるであろう。早稲田大学では、初期画面から著者名、書名などの項目をアルファベット記号で選択し、検索語を入力していく方式を採用しているが、この方式では複合検索を行うのが難しい。また、書名のフィールドを間違えて選んでしまった場合、初期画面に戻らなくてはならないという煩わしさもある。画面埋め込み方式ならば、利用マニュアルを見ることなく使い方が簡単に推測できると考えられる。

2. 操作の方法

今回の調査結果から明らかになったように、OPACを利用する際、学生はキーボード操作でかなり苦勞を強いられている。コンピュータを使っている学生は7割に達しているとはいえ、キーボードを用いて入力することに難しさを感じている。この問題の一つの解決策は、公立図書館で多く見られるタッチパネル方式のOPACである。しかし逆に、ブラインドタッチができるほどキーボードに慣れ親しんでいる学生にとっては、タッチパネル方式では使いにくいと感じるであろう。そこで、キーボード入力のOPACとタッチパネル方式のOPACの両方を設置することが望ましいと言える。

実際には、半角や全角を意識しないで入力できるならば、かなり使いやすいOPACになると考えられる。また、英文字とひらがなの切り換えについても、操作に必要なキーに印をつけるなどの工夫が不可欠である。

3. 利用者の教育

OPACの提供側は、利用者がOPACに対する理解を深める機会を増やす必要がある。今回の調査対象者の中で、OPACを大学2年や3年の時から使い始めた学生も多くみられた。大学入学直後にOPACの利用法のセミナーを受けることができれば、OPACの利用度は高まると予想される。学生にとっては、学年が上がるにつれて、OPAC利用法セミナーには心理的に参加しにくくなり、OPACから遠ざかってしまうことがありうる。OPAC利用法セミナーに参加したことのある学生は、今までコンピュータの使い方よくわからなかったが、参加してからはOPACの検索方法もよくわかるようになったと述べている。セミナーでは、コンピュータの初心者向けに基本的な操作方法を教えることも必要であるが、他にも、前述したような利用者にとってわかりにくい点を集中的に、丁寧に教える必要があるだろう。

また、今回の調査でも、OPACの利用時にわからなくなったり困ったりすることがあるが、直ぐに援助ができる担当者が近くにいることが望ましいという意見があった。大学図書館は、OPAC利用法セミナーを開催すると同時に、日常的に学生が質問しやすい環境や体制を整えることが求められている。

調査にあたってご協力下さった慶應義塾大学日吉メディアセンター、早稲田大学中央図書館、明治大学中央図書館の皆様、それにインタビューにあたって快く応じて下さった方々、そしてご指導下さった慶應義塾大学文学部図書館・情報学科の上田修一教授に感謝の意を表したい

注・引用文献

- 1) 日本図書館学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 東京, 丸善, 1997. 244p.
- 2) 菅野育子. “情報検索システムとしてのOPAC評価基準の考察”. *Library and Information Science*. No. 35, p. 41-49 (1996)
- 3) 牧村正史, 竹内比呂也. “大学図書館における目録の評価について: OPACの機能を中心として”. *大学図書館研究*. Vol. 43, p. 1-11 (1994)
- 4) 上田修一. “日本の大学図書館のOPACの現状”.

大学図書館における OPAC の利用者の探索行動

- 図書館学会年報. Vol. 41, No. 2, p. 81-88 (1995)
- 5) 上田修一ほか, “OPAC における学生・院生の探索行動: 観察による調査”. 学術情報提供システムとしての OPAC の総合的研究. p. 41-74 (1997)
 - 6) Hancock-Beaulieu, Micheline, et al. “Evaluation of Online Catalogues: Eliciting Information from the User”. Information Processing and Management. Vol. 27, No.5, p. 523-532 (1991)
 - 7) Wildemuth, B. M.; O'Neill, A. L. “The ‘Known’ in Known-Item Searches: Empirical Support for User-Centered Design”. College and Research Libraries. Vol. 56, No. 3, p. 265-281 (1995)
 - 8) Borgman, C. L.; Hirsh, S. G.; Walter, V. A.; Gallagher, A. L. “Children’s Searching Behavior on Browsing and Keyword Online Catalogs: The Science Library Catalog Project”. Journal of the American Society for Information Science. Vol. 46, No. 9, p. 663-684 (1995)
 - 9) Millsap, L.; Ferl, T. E. “Search Patterns of Remote Users: An Analysis of OPAC Transaction Logs”. Information Technology and Libraries. Vol. 12, No. 3, p. 321-343 (1993)
 - 10) Solomon, Paul. “Children’s Information Retrieval Behavior: A Case Analysis of an OPAC”. Journal of the American Society for Information Science. Vol. 44, No. 5, p. 245-264 (1993)
 - 11) Chen, Shu-Hsien. “A Study of High School Students’ Online Catalog Searching Behavior”. School Library Media Quarterly. Vol. 22, No. 1, p. 33-39 (1993)
 - 12) Hunter, R. N. “Successes and Failures of Patrons Searching the Online Catalog at a Large Academic Library: A Transaction Log Analysis”. RQ. Vol. 30, No. 3, p. 395-402 (1991)
 - 13) 三浦逸雄ほか, “国際基督教大学図書館における目録利用行動: インタビュー調査”. Library and Information Science. No. 18, p. 29-58 (1980)

付 録

質問票

問1 今、OPACを使っていらしたのは何のためですか。

- 1 クラスの宿題
- 2 クラスに関係した読書(宿題以外)
- 3 ゼミ・研究会
- 4 卒業論文
- 5 サークル活動
- 6 自分の関心
- 7 その他

問2 今回の検索では、何を探していらしたのですか。(本・雑誌)

- 1 あるテーマ・トピックスについての資料
- 2 OPACを使う前に、著者名と書名のわかっていた資料
- 3 OPACを使う前に、著者名だけわかっていた資料
- 4 OPACを使う前に、書名だけわかっていた資料

問3 在籍している学部・学科・学年を教えてください。

() 学部 () 学科 () 年(M・F)

問4

① 普段どのくらいの頻度で図書館を利用していますか。

- 1 毎日
- 2 週3~4回
- 3 週1~2回
- 4 月2~3回
- 5 月1回以下

② 普段どのくらいの頻度でOPACを利用していますか。

- 1 毎日
- 2 週3~4回
- 3 週1~2回
- 4 月2~3回
- 5 月1回以下

問5

① OPACを初めて使ったのはいつ頃ですか。

() 年生の() 月

② OPACの使い方を教わったことがありますか。→(はい or いいえ) はいと答えた方は、何を通じて教わりましたか。

- 1 授業
- 2 図書館員(OPACセミナーなども含む)
- 3 友達
- 4 本→書名()
- 5 その他

③ パソコンやワープロを普段から使っていますか。→(はい or いいえ)

問6

① OPACについてどのような印象を持っていますか。

- 1 利用しやすい
- 2 全体としては利用しやすいが、利用しにくいところもある
- 3 利用しにくい
- 4 何ともいえない

② その理由を教えてください。その他、OPACについてご意見・ご要望があればお聞かせください。

A. 主題探索(問2で1と回答)の場合

- A1 どんなテーマについての資料を探されたのですか。
- A2 このテーマについての資料を探すのに、どんな言葉を入力しましたか。
- A3 この言葉をどのようにして知りましたか。
 - 1 前から知っていた
 - 2 自分で考えた
 - 3 課題のテーマ
 - 4 その他

A4 ヒットした件数の中から、どの資料が適切かということを判断したの
は、どの部分を見てからですか。

- 1 書名
- 2 著者・編者・団体名等
- 3 請求番号
- 4 出版年
- 5 出版社・出版者
- 6 つかわれている言語
- 7 その他

A5 検索結果について、どのくらい満足していますか。

- 1 よさそうな資料が見つかり、とても満足している
- 2 ある程度満足しているが、もっといい資料があるのではと思う
- 3 欲しいと思う資料が見つからず、不満だ
- 4 見つかったが、すぐ入手できそうになく、不満だ
- 5 その他

A6 これからどうなされますか。

- 1 書架に行く
- 2 参考図書(書誌・索引等)をしらべる
- 3 教師にたずねる
- 4 図書館員にたずねる
- 5 友人にたずねる
- 6 他の図書館に行く
- 7 書店に行く
- 8 あきらめる
- 9 特に決めていない
- 10 その他

B. 既知事項検索(問2で2・3・4のいずれかを回答)の場合

B1 著者名と書名のどちらを入力して探されましたか。

- 1 著者名(姓と名)
- 2 著者名(姓のみ)
- 3 著者名(名のみ)
- 4 書名

B2 この資料をどこで知りましたか。

- 1 教師の紹介(宿題・リーディングリストを含む)
- 2 参考文献や注(図書・雑誌論文の)
- 3 参考図書(事典・書誌・索引・研究入門等)
- 4 書評
- 5 前にOPACで調べた
- 6 以前、図書館で現物を見た
- 7 友人から教えてもらった
- 8 広告・書店
- 9 その他

B3 この資料は、OPACで見つかりましたか。→(はい or いいえ) いいえと答えた方は、これからどうなされますか。

- 1 図書館で代わりの本を見つける
- 2 著者名・書名をもう一度たしかめる(参考図書や参考文献にあたって)
- 3 図書館員にたずねる
- 4 相互貸借を申し込む
- 5 図書館に購入希望を出す
- 6 他の図書館に行く
- 7 書店に行く
- 8 あきらめる
- 9 特に決めていない
- 10 その他